

1	チーム名 (研究対象領域・教科) 小学部自立活動②
2	メンバー 小学部教員 4人
3	チームのテーマ 身体の動きと各教科等との関連 (自立活動の視点での日常生活動作の向上)
4	対象児童生徒に願う主体的な姿 ・型はめの学習を通して、すべらせる形を見ることで、自分の手の動きを追うこと。
5	研究仮説 形の学習を通して、注視や追視などの視機能の向上を図り、見る力の育ちと共に、食事・排せつ・衣服の着脱などの学習にも役立っていくのではないかと。
6	研究実践の内容 (1) 事例研究 [対象児童] 小5、重複障がい [実態] ・視力は不明だが、遠視矯正の眼鏡使用。視野は左側が見えやすい (昨年来校された盲学校の教員の指導助言による)。 ・座位はとれるが、前方左側へ顔が下向きで、頭を下げていることが多い。 ・発声は「ハイ」「マン」。話しかける言葉のリズムを手拍子で打ってやりとりすることを好む [実施時期] ① 8月～日常生活の流れにそって、生活のリズム作りを行う。朝の身辺処理の学習や歩行学習の後、10分程度の机上学習の時間を設ける。 ② 9月～10月の文化祭行事の練習が多い時期。○のはめ板 一対一対応を、週2～3回の実施。 ③ グループ内でVTR視聴し、授業検討会。改善事項の話し合い。 (改善点)・姿勢保持の必要性 ・型はめ以外の追視ができる教具の呈示 ④ 11月～現在 対象児童が、○(まる)の積木をはめ板の左右上下どこにも呈示しても操作できるようになったので、○(まる)と△(二等辺三角形)の二者択一(後出し・先出しの時間差有り)を実施。 また、型はめ以外の追視ができる玩具の実施。 [現状] ① 型はめでの場面 ・○(まる)の積木を持ち上げずに、はめ板の上ですべらせるように入れるようになってきた。しかし、すべらせる手元は、まだ見ない。 ・最初に下に向いている顔の視界に入れるように見せる時だけしか、目で確認していない。 ・利き手で取った形をはめようとする。まだ「見比べる」(または、触って違いが分かり、一度△をつかんでも放す)ことがない。 ② 玩具での場面 ・アンパンマンの玉入れの玩具(らせん状のレールがある)に対しては、ボールを入れると音楽が鳴るので喜んでやっている。 ・音楽だけが理由か不明だが、聴く事に注意がむき、ボールを入れると、視線は離れて、ボールを目で追うことができない。また、ボールが途中でレールの上で止まっている場合、そのボールに気づかない。 ・空き缶ボールを入れる手作り玩具に対しては、少し力を入れて押し込まないといけないので、

顔をあげる効果はあった。しかし、見ることよりも、ボールを入れるという動作を覚えたようだった。

7 成果と課題

形の学習を通してとのことだったが、形の認識よりも、何かを入れればよいということ覚えてしまった感じがある。また、本人に一人でできるようになることより、見たときに「見たね」と言葉をかけて、一緒に操作をする時間が長くなっても、じっくり見る力を育てる必要があった。

対象児童は、決して見えてないわけではないが、現段階では、優位な聴覚とスモールステップの呈示に誘導されて手に取っている。また、慣れた場所で習慣化してしまうと、見なくても済む状況が多い。自分で（触覚や視覚を使って）判断することが課題である。また、身体の動きに関しては、机上学習前の基盤として、座位や立位の訓練が必要と考えられる。

型はめ場面の教師の働きかけ

学習活動・内容	時間 (分)	教師の働きかけ	留意点
積木の型はめをする。 ・円をはめる	5	<ul style="list-style-type: none">・はめる所を手でふれさせ、「まるだよ」と言葉をかけながら「円」を確認させる。・姿勢が正面を向き、視線を誘導させるようにする。・手元を見ていたら、称賛する。見ていない場合は、手元を指先で軽くたたくなどして見るように誘導する。	<ul style="list-style-type: none">・教師は「先生と一緒にするよ」「できたね」という意欲を喚起するように言葉をかける。